

ペットは家族とみなせるか（1）

— 家族概念と主観的家族についての検討 —

Can Pets Be Regarded as Family? (1)

— A Study on the Concept of Family and Subjective Family —

松田光恵

くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学『研究紀要』

第49巻 第1号 別刷

2016年9月

ペットは家族とみなせるか（1） —家族概念と主観的家族についての検討—

Can Pets Be Regarded as Family? (1)
A Study on the Concept of Family and Subjective Family

松田光恵
Mitsue MATSUDA

Abstract

Subjectivistic family studies assume that “the extent to which one thinks that one is family, constitutes family.” and attempt to explore the image of a modern family by trying to understand those that the individual subjectively considers family. The present study aimed to explore the relationship between pets and humans by reconsidering the meaning of family from the perspective of subjectivistic family studies. A questionnaire survey was administered to 255 university students. Results showed that the requirements for being considered family consist of emotional bonds and physical connection. The study indicated that regarding pets as family meant that individuals were aware of family as family on another dimension and as family as an emotional bond. When regarding pets as family, aspects such as living under the same roof, sharing a living space, and living together were considered important. Further, it was indicated that being family meant being an important presence with which one can have love, show affection, and build an emotional bond. A “pet” can indeed become this presence. A pet can live with us in the same living space and satisfy our need for an emotional bond, which fulfill the conditions for family. The study suggests that pets play the role of a subjectivistic family member with whom one can have an emotional bond.

キーワード：主観的家族、ペット、コンパニオン・アニマル、ヒューマン・アニマル・ボンド

問題

家族社会学において、家族とは「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的係わり合いで結ばれた、第一次的な福祉施行の集団である」と定義されている（森岡・望月, 1983）。これまでの家族とは、戦前のイエ制度から脈々と続く父系社会があるべきその姿とされてきた。しかし、近代家族の形態は直系家族から核家族へと変容し、家族意識も、直系家族意識から夫婦家族意識へと変化している（野辺, 2007）。また、血縁の共同、法的に基づいた性関係等がこれまでの家族としての根拠とされていた。しかし「家族の多様化」（久保田, 2009）にみられるように離婚率の増加、選択的に子をもたない夫婦など、様々な要因を背景に、旧来の家族像は根底から揺らいでいる。家族社会学では家族定義は未だ合意の得られない問題とされており、従来の家族定義に逸脱した多くの例外に遭遇（山根, 1972）することが、家族定義に未だ合意が得られない要因である（松本, 2013）とされている。現代の家族観は多様なライフスタイル、個人の選好が尊重され

る風潮にある。

そのような風潮を受け、1980年代後半から家族定義の問題はより複雑化した。性別役割分業型の核家族以外の家族が増加し、研究者が従来の家族定義を用い“標準的な一般的な家族”を設定すること自体に批判が集まっている。それを後押ししたのは日常的な家族概念への注目、すなわち“主観的家族論”である（松本, 2013）。主観的家族論では、「自分が家族だと思う範囲が家族である」とし、個人が主観的に誰を家族と考えているのかを捉えることで、現代の家族像を探ろうとするものである（山田, 2004）。家族と意識する基準は、社会によって文化によって、または時代によって個人によって異なっている。これら主観的家族論では、家族であることのリアリティを生成させるプロセスが大事である、とされている（山田, 1992）。

人々は何らかの基準を用いて、家族である／ない、の判断を無意識に行っており、家族と意識する際には、①親族であること②家族としてすべき活動をしていること③情緒的に愛着を感じること、の3つが基準として用いられている（山田, 1989）。我々が従来から思い描く家族というものは、上記の3つが寸分違わず揃った形態を頭に浮かべる。しかし、近年の家族形態の変容を鑑みると、実際は「家族」の多様な形態が想定され、それによって「家族」と捉えられる範囲も変容していると考えられる。上記の3基準を踏襲しながらも、多様な付加要素が存在する、それが現代の家族観である。

現代の家族像を正確に捉えるには、従来の家族定義のみならず、主観的家族論の視点、その批判も踏まえた見通しが必要であろう。近代家族の形態が変動している今、認識の枠組み変換の必要性が求められている（春日井, 2001）。

目的

そこで本研究では、家族としてのペットの可能性を探る。ペットはヒトと種を異にするが、あたかも配偶者のように、子どものように、癒しを授けてくれ、心安らぐ対象となりうる。人びとは「ペットは家族の一員（62.7%）」（アサヒホールディングス, 2008）と考え、ヒトとペットを区別する境界線は薄くなっている。ペットにおしゃれをさせ、一緒に旅行に出かける。ペットが病気をすれば高度な医療を施し、死ぬと葬式をし、墓を作り供養をする。核家族化社会の中でペットの存在が肥大化しているのである（内藤, 2011）。

山田（2014）は、ペットに遺産を相続させたいと相談に来た高齢女性の例、離婚にあたってのペットの親権裁判の例、などを挙げ「ペットを家族とみる人たちの増加は、単にプライベートな趣味といったものではなく、司法や行政にも関わる一種の社会現象なのである」としている。また、家族ペットの心理的意味として、ペットは「取り替えがきかない存在」としての家族の一面を表しているとし、自分にとってかけがえのない存在と思える、だからこそペットは家族と感じているのだ、としている（山田, 2014）。また、ペットに対する意識の研究（松田・川上, 2008）において、ヒトはペットを「情緒的交流」ができる、「擬人化」できる対象としており、「代替不能」（松田, 2007）と捉えていること、ペットの存在に関する研究では、ペットは「家族的役割」を果たしていることが見出されている（松田・石山, 2009）。

つまりペットは、家族の代替物になり得る唯一無二の存在である。従来の家族観が揺らぎ、個人の選好が重視される今、改めてペットの存在とは何かを問い合わせ、人びとの家族の捉え方を明らかにすることが必要とされるであろう。本研究の目的は、主観的家族論の観点を用い家族の意味を問い合わせ直し、ペットとヒトの新たな関係性を探るものとする。

方法

大学生を対象に家族観（どの範囲まで家族か、家族であるために必要なもの）とペットと家族の関係について、質問紙調査を行った。以下に質問紙調査の調査協力者、期間、内容に分けて記載する。

1. 調査協力者

調査は集合調査であり、大学1年次開講の授業時間を利用して行った。調査対象者は、男性46人(18%)、女性209人(82%)の計255人、平均年齢は18.8歳、SDは1.34歳であった。そのうちペットを飼っている人は32.5%、飼っていた経験がある・実家で飼っている(現在別居)の人は36.5%、飼っていない人は30.6%であった。

2. 調査期間

2015年6月

3. 調査内容

「家族の範囲に関すること」(山田, 1989)、「家族としての必然性」(山根, 1986、成瀬・斎藤, 2010)、「ペットを家族とみなすことについての意識」(古川, 2015)の3概念から質問項目を作成し、フェイシートを加えた計50項目についてアンケート調査を行った。

A 「家族の範囲に関すること」

各質問に関して家族とみなすかどうかについて、1家族だと思う、2どちらかというと家族だと思う、3どちらでもない、4どちらかというと家族だと思わない、5家族だと思わない、の5段階で尋ねた。Q1.結婚したときから別々に住居を持っているが、よく行き来する夫婦 Q2.単身赴任していて、ほとんど行き来がない夫婦 Q3.一緒に生活しているが、愛情がまったく感じられなくなった夫婦 Q4.法律的には夫婦でも、嫌いになって別居している夫婦 Q5.未婚で別居しているが、親から仕送りを受けている子ども(と親の関係) Q6.未婚で別居しており、仕事について親と独立の家計を営む子ども(と親の関係) Q7.血がつながった親子だが、生まれてすぐ養子縁組をし、以後会っていない関係 Q8.息子が結婚して同居し、一緒に生活している時の、息子と両親の関係 Q9.息子が結婚して同居しているが、食事や家計は親夫婦、子ども夫婦別にしている場合の息子と両親の関係 Q10.息子が結婚して別居している親夫婦、子ども夫婦の関係 Q11.娘が結婚して夫の姓に変わったが、娘の親夫婦と同居している時の親一娘関係 Q12.娘が結婚し夫の姓に変り、別居しているが行き来の頻繁な親一娘関係 Q13.娘が結婚し夫の両親と住んでいる場合の親一娘関係 Q14.夫の両親と同居し、和やかに一緒に生活をしている嫁と夫の親 Q15.夫の両親と同居しているが、お互いに不和な嫁と夫の親 Q16.愛情を込めて育てているペット、の16項目である。

B 「家族としての必然性」

家族であるためには、どのようなことが必要なのか、1重要、2やや重要、3どちらでもない、4あまり重要でない、5重要でない、の5段階で尋ねた。Q17.法的な繋がりがある Q18.血の繋がりがある Q19.経済的に繋がりがある Q20.精神的にきずながある Q21.互いにありのままでいられる Q22.困ったときに助け合う Q23.生活を共にしている Q24.生存、生活、成長する上で、代わりの利かない存在である Q25.愛情があり、かけがいのない存在である Q26.あなたはどの範囲の人々(モノ・生き物・ペット etc)を家族とみなしますか。具体的に書いてください(自由記述) Q27.その人々(モノ・生き物・ペット etc)とは同居していますか、別居していますか Q28.Q26で書いたその人々(モノ・生き物・ペット etc)をなぜ家族とみなすのですか(自由記述)、の12項目である。

C 「ペットを家族とみなすことについての意識」

ペットと家族についての意識を、1あてはまる、2ややあてはまる、3どちらでもない、4あまりあてはまらない、5あてはまらない、の5段階で尋ねた。Q29.ペットは人間の代わりになるので家族である、Q30.ペットは心の支えになるので家族である、Q31.ペットが家族であるという考えは人間の都合であるから、ペットは家族ではない、Q32.ペットは飼っていると愛着がわいてくるので家族である、Q33.ペットは家族だという考えに違和感がある、Q34.ペットは家族だという考えは法的に

違反である、Q 35.飼えば生き物の面倒をみる責任があるので、ペットは家族である、Q 36.ペットと人間は種が違うので家族ではない、Q 37.ペットを家族だと思えば家族である、Q 38.ペットを家族だと思うのは当然である、Q 39.ペットには思い入れがない、Q 40.ペットは家族とは別の存在である、Q 41.ペットは無条件に愛情を注げる対象なので家族である、Q 42.ペットとは言葉が通じないから家族ではない、Q 43.人間の方が大事なので、ペットは家族ではない、Q 44.ペットはかわいいから家族である、の 16 項目である。

結果

「家族としての必然性」の因子分析結果

「家族としての必然性」の質問項目である Q 17～Q 25 「あなたにとって家族であるためには」、の計 9 項目について因子分析を行った。主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転後、絶対値で .35 以上の因子負荷量を持つ項目について 2 因子が抽出された（表 1 参照）。

表 1 「家族としての必然性」の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

	因子負荷量		
	I	II	共通性
第 I 因子：精神的きずな			
困ったときに助け合う	.807	.007	.652
互いにありのままでいられる	.792	.093	.636
愛情があり、かけがいのない存在である	.705	.023	.497
精神的にきずながある	.650	.199	.462
生存、生活、成長する上で、代わりの利かない存在である	.533	.108	.295
第 II 因子：物質的繋がり			
血の繋がりがある	.077	.703	.500
法的な繋がりがある	-.106	.702	.504
経済的に繋がりがある	.184	.649	.455
生活を共にしている	.270	.358	.201
因子寄与	2.61	1.60	4.20
累積寄与率	28.95	46.70	

第 I 因子は、愛情や互助の関係にあり、精神的に大切な存在とし、「精神的きずな」、第 II 因子を、血の繋がりや、経済的な繋がりとし、「物質的繋がり」と命名した。信頼性係数はそれぞれ、 $\alpha = .83$, .69 であった。

「ペットを家族とみなすこと」の因子分析結果

「ペットを家族とみなすこと」の質問項目である Q 29～Q 44 「ペットと家族についての意識」計 14 項目について、因子分析を行った（共通性の数値が 0 に近い Q 39、Q 41 は分析から除外している）。主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転後、絶対値で .38 以上の因子負荷量を持つ項目について 3 因子が抽出された（表 2 参照）。

表2 「ペットを家族とみなすこと」の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

	因子負荷量			
	I	II	III	共通性
第I因子：別次元家族				
ペットとは言葉が通じない	.857	.228	-.055	.790
人間の方が大事	.797	.223	.018	.686
ペットと人間は種が違う	.792	.278	-.006	.705
ペットは家族とは別の存在	.624	.318	-.068	.495
ペットは家族だという考えは法的に違反である	.462	.084	-.066	.225
第II因子：情緒的繋がり家族				
ペットは飼っていると愛着がわいてくる	.287	.777	-.054	.689
ペットは心の支えになる	.395	.683	.022	.623
ペットは人間の代わりになる	.148	.599	-.024	.381
ペットはかわいい	.104	.582	.041	.351
ペットを家族だと思うのは当然	.400	.523	.021	.433
飼えば生き物の面倒を見る責任がある	.068	.502	.078	.262
ペットを家族だと思えば家族である	.147	.386	-.013	.171
第III因子：観念拒否				
ペットが家族であるという考えは人間の都合	-.076	.039	.992	.992
ペットは家族だという考えに違和感がある	-.060	.034	.992	.989
因子寄与	3.07	2.73	1.99	7.79
累積寄与率	21.91	41.41	55.65	

第I因子を、ペットとは人間と種の違う動物であり人間の家族とは一線を画する存在とし「別次元家族」、第II因子を、ペットとは生活を共にすると家族としての情緒的役割を担う存在とし「情緒的繋がり家族」、第III因子を、ペットを家族と捉えることに違和感があり考えを受け入れることができないと捉え「ペット家族観念拒否」と命名した。信頼性係数はそれぞれ $\alpha = .85, .80, .95$ であった。

下位尺度間の関連について

上述の「家族としての必然性」、「ペットを家族とみなすこと」の因子分析結果において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を算出し、それぞれの下位尺度得点とした。

家族としての必然性尺度の2つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「精神的きずな」下位尺度得点 ($M = 1.32, SD = 0.49$)、「物質的繋がり」下位尺度得点 ($M = 2.20, SD = 0.79$)とした。2つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した（表3参照）。

表3 「家族としての必然性」の下位尺度相関、平均値、標準偏差

	精神的きずな	物質的繋がり	<i>M</i>	<i>SD</i>
精神的きずな	—	.224**	1.32	0.49
物質的繋がり	.224**	—	2.20	0.79

* $p < .001$

ペットを家族とみなすこと尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「別次元家族」下位尺度得点 ($M = 1.67, SD = 0.69$)、「情緒的繋がり家族」下位尺度得点 ($M = 1.81, SD = 0.64$)、「観念拒否」下位尺度得点 ($M = 1.53, SD = 6.01$)とした（表4参照）。

表4 「ペットを家族とみなすこと」の下位尺度相関、平均値、標準偏差

	別次元家族	情緒的繋がり家族	観念拒否	M	SD
別次元家族	—	.516**	-.098	1.67	0.69
情緒的繋がり家族		—	.028	1.81	0.64
観念拒否			—	1.53	6.01
**p<.001					

また異なる2つの尺度間に関係があるかどうかを分析した。その結果、計5つの下位尺度について、精神的きずなは、別次元家族と情緒的繋がり家族と、有意な中程度の正の相関がみられた。物質的繋がりは、情緒的繋がり家族と有意な正の相関がみられた（表5参照）。

表5 2尺度の下位尺度間相関

	別次元家族	情緒的繋がり家族	観念拒否
精神的きずな	.346**	.473**	-.062
物質的繋がり	-.074	.201**	-.034
**p<.001			

自由記述頻出語の結果

自由記述、Q26「あなたはどの範囲の人々（モノ・生き物・ペット etc）を家族とみなしますか」（回答数：231）、Q28「Q26で書いたその人々（モノ・生き物・ペット etc）をなぜ家族とみなすのですか」（回答数：78）に関し、KH Coder^{注1)}にて形態素解析を行った。頻出語一覧を示したもののが、表6（出現回数5回以上）・表7（出現回数2回以上）である。

表6 「どの範囲を家族とみなすか」 頻出語

順	抽出語	出現回数
1	ペット	151
2	家族	32
3	生き物	30
4	人	27
5	犬	18
6	一緒	15
6	思う	15
6	親	15
9	血	12
9	祖父母	12
11	自分	11
12	兄弟	10
12	飼う	10
12	両親	10
15	家	9
15	猫	9
17	愛情	8
18	繋がり	7
19	繋がる	5
19	大切	5
19	暮らす	5

表7 「なぜ家族とみなすか」 頻出語

順	抽出語	出現回数
1	一緒	18
2	存在	10
3	愛情	9
4	自分	7
4	生活	7
4	大切	7
7	家族	6
7	血	6
9	繋がる	5
10	育てる	4
10	繋がり	4
10	住む	4
13	過ごす	3
13	好き	3
13	心	3
13	暮らす	3
13	命	3
18	ペット	2
18	愛	2
18	育つ	2
18	家	2

また、自由記述Q26、Q28における頻出語を用い、どの範囲までを家族とみなすか、また何故そう思うのか、についてデータマイニングの手法を用い、テキストマイニングを行った。Q26、Q28自由記述に特徴的な語の抽出を行い、構造的な特徴を探るためクラスター分析と共にネットワーク分析を行った。クラスター分析により特徴語の記述パターンを分類し、共起ネットワーク分析によりその特徴語同士の共起関係を明らかにした。

「どの範囲を家族とみなすか」頻出語のクラスター分析結果

図1はQ26頻出語のクラスター分析結果である（出現回数4回以上）。クラスターは5つに分かれた。

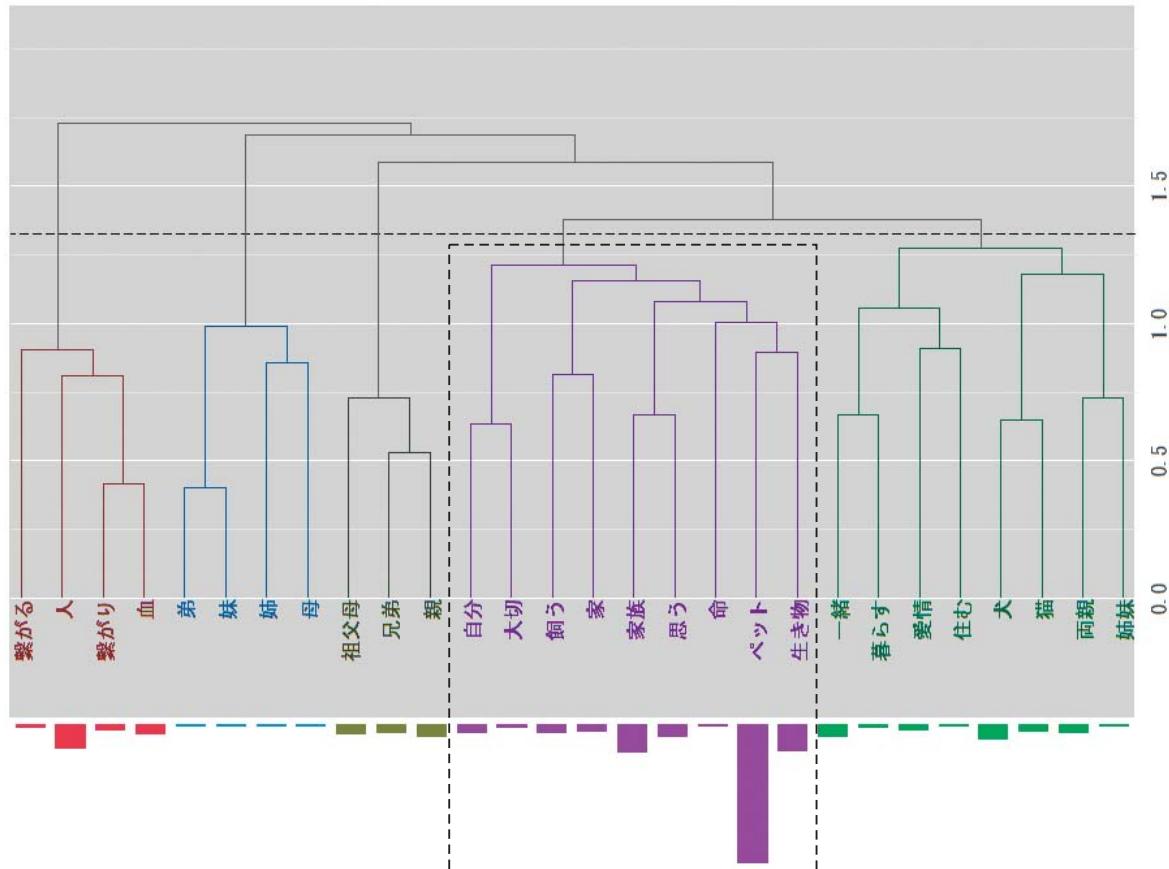


図1 「どの範囲を家族とみなすか」頻出語のクラスター分析

抽出語のまとめりから、クラスター1を「血の繋がり」・クラスター2を「肉親」・クラスター3を「2世帯3世帯家族」(これらをまとめて血縁)、クラスター4を「大切に飼っている生き物」・クラスター5を「愛情をもって一緒に暮らすもの」(これらをまとめて愛情)と解釈した(表8 参照)。

表8 「どの範囲を家族とみなすか」クラスター分析の特徴

クラスター	構成言語例	特徴
1	繋がる 人 血	血縁
2	姉妹 弟 妹 婦 母	
3	祖父母 兄弟 親	
4	大切 飼う 家族 命 ペット	愛情
5	一緒に暮らす 愛情 住む 犬 猫 両親 姉妹	

クラスター4では「自分」「大切」「飼う」「家」「家族」「思う」「命」「ペット」「生き物」の語の出現パターンが似通っていた。自分が大切にしている、家で飼っている、命あるペット・生き物は家族だと思う、と記述する傾向がみられた。家族とは自分にとって血の繋がりがあるもの、あるいは自分が愛情で繋がっていると感じられるもの、がその範囲と捉えられている。

「なぜ家族とみなすか」頻出語のクラスター分析結果

図2はQ28頻出語のクラスター分析結果である（出現回数2回以上）。クラスターは6つに分かれた。

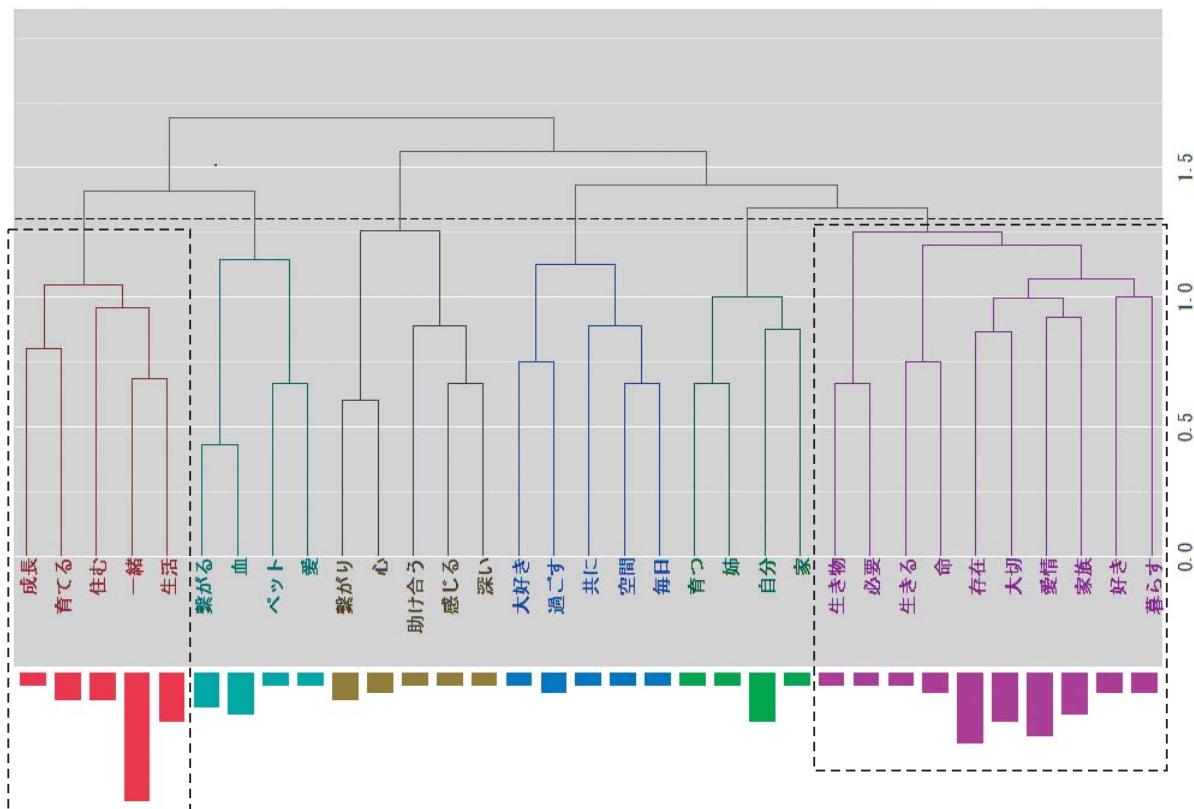


図2 「なぜ家族とみなすか」頻出語のクラスター分析

抽出語のまとめから、クラスター1を「一緒に生活しているから」（共生）、クラスター2を「血の繋がりや愛情があるから」・クラスター3を「心が繋がり助け合っているから」（これらをまとめて繋がり）、クラスター4を「毎日同じ空間で過ごし大好きだから」・クラスター5を「自分の家だから」（これらをまとめて家）、クラスター6を「大切な存在であり命だから」（愛情）と解釈した（表9参照）。

表9 「なぜ家族とみなすか」クラスター分析の特徴

クラスター	構成言語例	特徴
1	成長 一緒 住む	共に暮らす
2	繋がる 血 ペット 愛	繋がり
3	繋がり 心 助け合う	
4	過ごす 空間 共に	家
5	育つ 自分 家	
6	生き物 命 大切 存在 家族 普らす	愛情

クラスター1「成長」「育てる」「住む」「一緒」「生活」の語は出現パターンが似通っていた。一緒に住み、生活し、そこで成長し、または（生き物などを自分で）育てているから家族とみなす、と記述する傾向が見られた。またクラスター6「生き物」「必要」「生きる」「命」「存在」「大切」「愛情」「家族」「好き」「暮らす」の語は出現パターンが似通っていた。大切な存在であり、愛情がある、命ある生き物だから、と記述する傾向が見られた。一つ屋根の下に空間を共有し暮らすことと、助け合い愛情をもてるかどうか、そしてかけがえのない存在というキーワードが家族とみなされる要因である。

「どの範囲を家族とみなすか」頻出語の共起ネットワーク分析結果

図3は、Q 26 頻出語の共起ネットワーク分析結果である（出現回数 2回以上）。

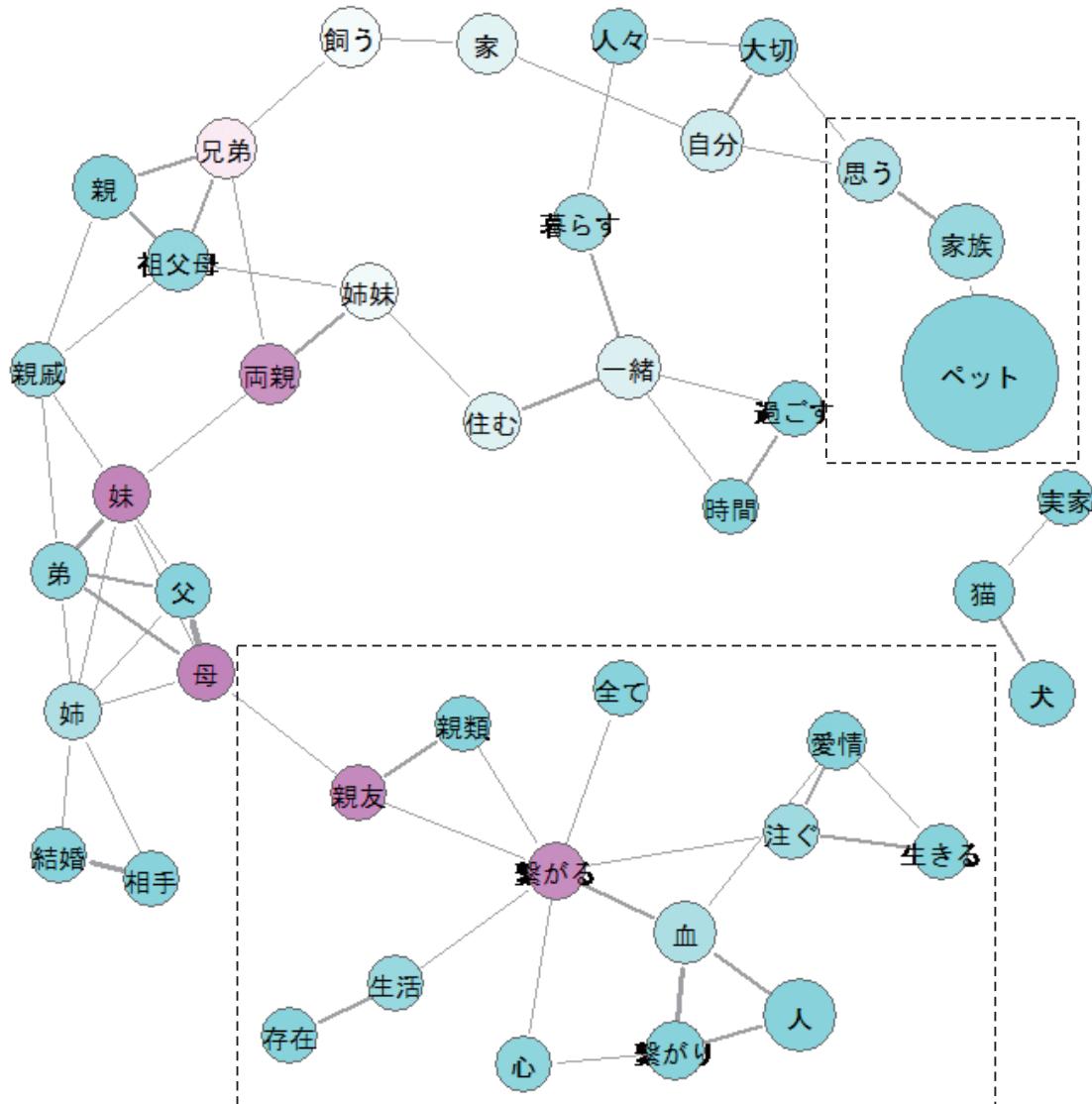


図3 「どの範囲を家族とみなすか」頻出語の共起ネットワーク分析

図3は出現パターンの似通ったもの、すなわち共起関係にあるものが線で結ばれている。中心性に もとづいて色分けされており、水色・白・ピンクの順に中心性が高くなっている。円の大きさは単語 の出現回数を表し、線の太さは共起関係の強さを表している。ただし、円同士の距離は意味をもたない。

結果から、ペットは家族だと思われており、両親、兄弟、祖父母、親戚、結婚相手など常識的な家 族範囲も当然ながら出現パターンが似通っていた。それと共に、「繋がる」が意識されている。血縁 で繋がる、親しさで繋がる、生活で繋がる、愛情を注ぐ対象と繋がる、心で繋がる。家族範囲の意 識としては、血縁関係と言う形式上のものだけではなく、情緒的な側面が重要視されている。

「なぜ家族とみなすか」頻出語の共起ネットワーク分析結果

図4は、Q28頻出語の共起ネットワーク分析結果である（出現回数2回以上）。

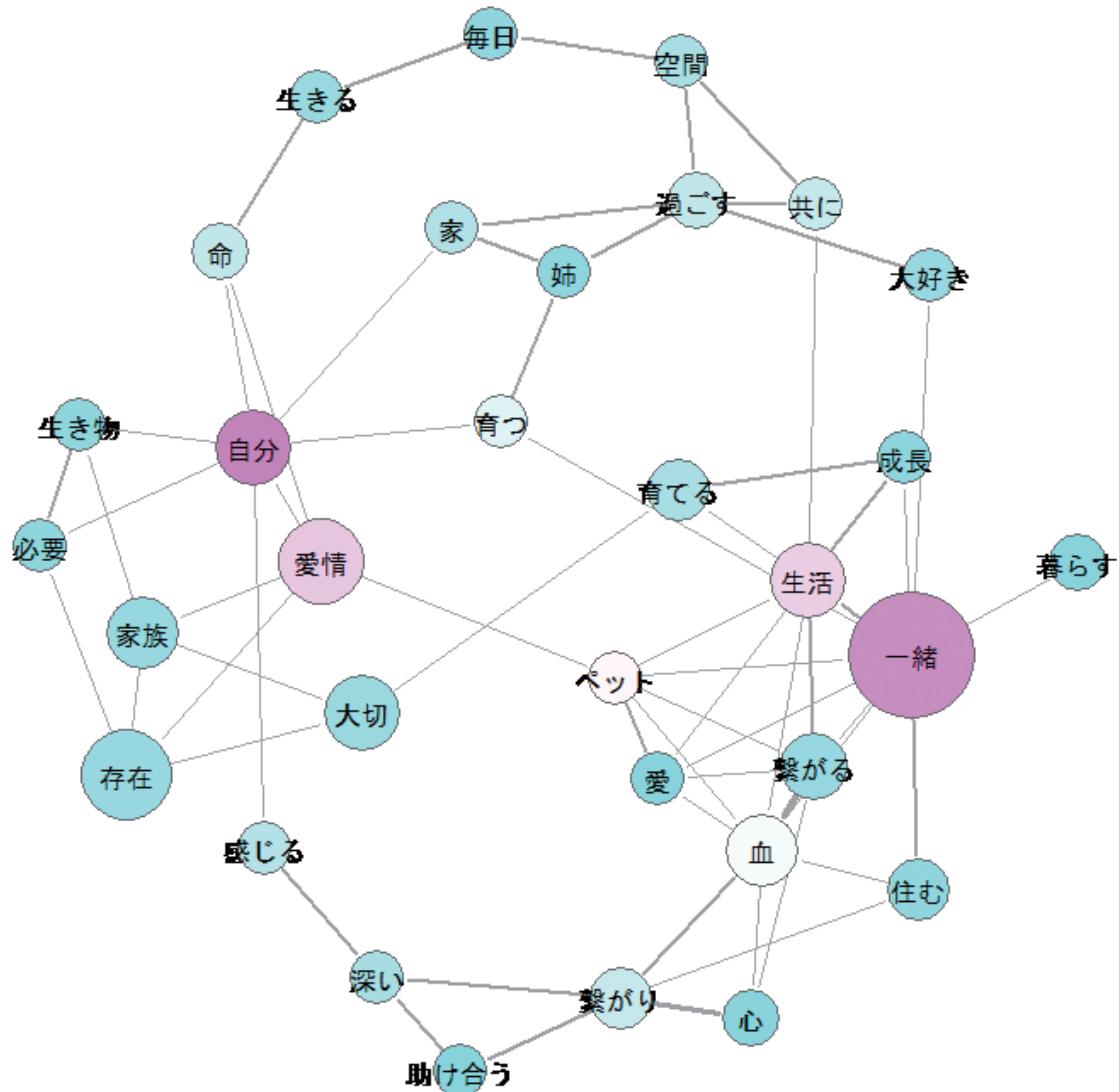


図4 「なぜ家族とみなすか」頻出語の共起ネットワーク分析

毎日同じ空間で生活し、共に過ごしているから家族である、と考えている様子が分かる。一緒に暮らす中で、家族成員とは血や心や、助け合いといった互助関係で繋がっており、ペットも愛情で繋がっているので家族である。また家族という存在は大切に思い、愛情を感じられる対象だから家族だと思う、と感じている。同じ空間での生活、そこで生まれる愛情や情緒的繋がりにより、家族意識というものを持っている。

命ある生き物であることや、愛情のもてる存在だから家族である。愛情をもって飼養しているからこそ、ペットも家族であるとみなしている。

考察

本研究において家族とみとめる際に必要なもの、それは愛情や互助の関係にある精神的な絆と、現代社会で重要視されている血縁や経済的側面などの物質的な繋がりであった。家族とみなす際には、一つ屋根の下に暮らし、空間を共有し、生活を共にしていることが重要である。そして愛情を持ち、情緒的な繋がりをもてる大切な存在が家族であると意識されていた。まさに“ペット”とは、その存在になりうる対象なのである。ペットとは同じ空間を過ごし、精神的な絆を満たしてくれるまさに家族そのものと感じられる。しかしその一方で、人とペットには種の違いという決定的な違いがあり、物質的な繋がりをもつことはできない対象でもある。我々人間にとってペットとは、心理的家族の役割を果たしていることが示唆された。

本論では主観的家族論の視点から、我々は家族に何を求め、なぜ家族と思うのか、について調査を行った。家族であることは、血縁関係であることのみならず、情緒的な関係であることが必要とされていることが分かった。田淵（1996）や松本（2013）は、「客観的と思われている家族定義と、主観的・個人的な家族像がどのようにズレており、いかにしてそのズレが生じるのかが考察の対象となるべきだ」としている。ここで論じられているズレとは、「家族だが家族と感じない」「血の繋がりはあるが、かけがえのない存在ではないから家族とは思わない」という意味を含んでいる。ペットに置き換え考えると、「血の繋がりはないが、かけがえのない存在だから家族と思う」と換言することが出来るだろう。逆説的であるがそのズレの部分でペットは家族らしく感じられ、ゆえにペットは家族であると捉えられているのではないか。今回の研究では、そのズレについて問題提起の一助を成したと考えられる。次回の研究では、そのズレがなぜ生じるのかについて明らかにしていきたい。

参考文献

- アサヒグループホールディングス（2008）ハピ研 第252回 アンケート結果,
<http://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/200809/00252/>
- 古川勝也（2015）「家族」としてのペットへの期待（第2報），第7回動物介在教育・療法学会学術大会, pp 32
- 春日井典子（2001）主観的家族境界からみる親子ライフスタイル，清水 新二（編）『家族生活についての全国調査（NFR 98）報告書 No. 2-4: 現代日本の家族意識（Family consciousness in the contemporary Japan）』（日本家族社会学会 全国家族調査（NFR）研究会），pp 97-110
- 久保田裕之（2009）「家族多様化」論再考一家族概念の分節化を通じて一，家族社会学研究，第21巻 第1号, pp 78-90
- 松田光恵（2007）ペット意識に関する調査～ペットブームを支えるヒトの意識とは何か～，日本社会心理学会 第48回大会 ポスター発表 日本社会心理学会第48回大会論文集, pp 754-755
- 松田光恵・石山玲子（2009）ペットの存在に関する一考察 一ペット尺度再分析一,日本社会心理学会第50回大会日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会 ポスター発表, 合同大会発表論文集, pp 372-373
- 松田光恵・川上善郎（2008）ペット意識尺度の再検討の試み—ペットブームを支えるペット意識の構造一,『コミュニケーション紀要』成城大学大学院 第20輯, pp.77-98
- 松本洋人（2013）家族定義問題の終焉—日常的な家族概念の含意の再検討一，家族社会学研究，第25巻 第1号 pp 52-63
- 森岡清美・望月 嵩（1983）新しい家族社会学，培風館

- 野辺陽子（2007）韓国における家族研究の新しい潮流—女性のエイジェンシーから分析する家族意識の動態—，書評ソシオロゴス，No.3，pp 15-29
- 内藤理恵子（2011）ペットの家族化と葬送文化の変容，宗教研究，85巻1輯，pp 151-173
- 成瀬千枝子・齋藤華織（2010）青少年の生き方を支える「家族の絆」の構築戦略，研究調査報告書（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究調査本部 共生社会づくり政策研究群，pp 1-90
- 山田昌弘（1989）家族とジェンダー，江原由美子他編「ジェンダーの社会学 女たち／男たちの世界」，新曜社，pp 96-100
- 山田昌弘（1992）家族であることのリアリティ，好井裕明編「エスノメソドロジーの現実」，世界思想社，pp 151-166
- 山田昌弘（2004）家族ペット，サンマーク出版
- 山田昌弘（2014）
　　ペットは家族なのか，マグナカルタ Vol.6 SUMMER，ヴィレッジブックス，pp 152-165
- 山根常男（1986）家族の倫理，垣内出版

注

注 1) KH Coder:テキストマイニングのためのソフトウェア。新聞記事や、質問紙調査における自由記述項目などによって得られる様々な日本語テキストデータを分析するソフト。